意味を持つものと云えよう。

しかしながら、現在の無秩序と混乱の中にあっても、古い因襲や「しきたり」などにとらわれないで、新しい家族関係を確立しようとする建設的な努力は、例えば父親の子どもに対する、従来のような権威的な隔絶的存在から、身近に愛情を直接的に示す存在へ向かおうとしてなされているいろいろな努力の中や、母親の、夫に対して、自己の地位を夫と平等なものとして、自己を堂々と主張するようになった態度の中、子どものことを一個の人格として認めるようになった両親の態度などにはっきり表れている。そこで今回は、このような動きが、具体的にはどのような型で表れているか、ということを家族成員個々について、私共がおこなった家族関係に関した調査を中心に考察を試みてみた。

保育所における幼児と動物との関係について

―自然観察のカリキュラム構成に関する一考察―

広島・やわらぎ学園保育園
樋口三紀子

この研究は保育所における自然観察のカリキュラム構成に関する基礎的研究の一つとしておこなったもので、保育所内における幼児の生活の中から彼らと動物との関係を多角的に観察調査し、次の結果を得た。

(1) 保育所内で、幼児が比較的身近に観察出来うる動物は、家畜五種、自然的動物二十五種で、これらの種類は季節的に変化し、幼児がより多くの動物に接しうる期間には、おのずから限界がある。

(2) 幼児がこれらの動物に接する頻度は、女児に比して男児が著しく高く、自然的動物において特にそれらの違いが甚しい。

(3) 幼児に動物の名を聞き、その正解率を調べると、年令差、男女差がみられた。すなわち正解率は年令の増すにしたがって高くなる。この傾向は三才から四才にかけて特に著しい。男女差は年令が増すにしたがって著しくなる。

(4) 動物を、家畜、自然、動物園の三群に分けた場合、家畜は他の動物群に比して、幼児の正解率は高く、しかも他の動物群においてみられる男女差はほとんど認めがたい。これは家畜が他の動物にくらべて、幼児の接する機会の多いことに原因し、動物に接する頻度が正解率に平行する結果が得られた。

(5) 幼児の絵本には家畜が最も多く扱われ、自然的動物はごくわずかである。

(6) 自然的動物も絵本に扱われている場合、その正解率は高まり、正解率が絵本によっても強く影響されていることがわかる。

以上の調査事実から自然観察のカリキュラム構成にあたっては、使用する動物を所内に求め、幼児の年令差、男女差をじゅうぶん考慮に入れるべきであることがわかった。また動物に対する理解は直接的観察と絵本からの知識の複合によって、より効果をあげうることが分った。